

世界銀行の調達方式

公共工事の調達においては、長年にわたって世界各国において価格競争が主流でしたが、1990年代以降、多くの国において価格だけでなく品質を重視すべきとの考えにより技術競争が導入されるようになりました。世界最大の国際開発金融機関である世界銀行においても、2016年から調達方式が大きく変わりました。世銀の調達方式は世界標準に近いもので、わが国の調達方式に取り入れるべき点も多く見られることから、その概要を以下に紹介します。

世銀は世界銀行（World Bank）の略称であり、各国政府や機関に融資などを行っています。1945年に設立された国際復興開発銀行（IBRD）を指していましたが、1960年に国際開発協会（IDA）が設立されてからはあわせて世銀と呼んでいます。世銀は、1960年代に整備した調達の枠組みを長らく適用してきましたが、2012年に総裁が交代して以来、調達制度を大幅に見直して半世紀ぶりの大改革として新たな調達制度の運用を2016年7月から開始しました。

世銀においては、導入以来原則としてきた価格競争方式についてさまざまな弊害が指摘されるようになり、2012年から調達制度の見直し作業を始めました。改革の最大のポイントは、Value for Moneyの概念を導入したことです。この概念は、ライフサイ

クルコストや単純に価格換算できない要素等を評価して、支払額に対して価値を最大化するよう受注者を選定しようとするものです。従来、コンサルティング業務の受注者選定の際にのみ用いられていた質（Quality）を評価しようという考えが、建設工事等にも適用されることになりました。また、調達の対象物によって調達方法を変えるべきという考えのもと、物品、工事、非コンサルティング業務、コンサルティング業務等について計25の文書が2016年7月1日から運用されるようになりました。

Value for Moneyは、価格要素だけでなく必要に応じて非価格要素も取り入れようというものであり、最低価格落札者（lowest evaluated compliant bid）ではなく、最大価値落札者（best value bid）を選定しようとするものです。手順としては、まず、①メンテナンスや運転のコストが初期投資に比べて相当程度と見込まれる場合にライフサイクルコストを算定して割引現在価値（net present value）を評価します。

さらにValue for Moneyを達成するために、②価格評価できない要素についても評価点（Rated Score）として判断基準に織り込みます。具体的には、請負者の過去の実績や技術力、技術提案書に記載された実施手順・主要技術者・主要器具・現場の体制・

十分な資金が確保できておらず、新しい法律の立法が間に合わなければ、40%の縮小になると予測され安全性・品質保証等、そして要件を満たす履行能力などを技術点として点数化します。

最終評価の点数は、上記の①の考え方に基づいて求められるコストを評価したものと、上記②の非価格要素を点数化した技術点をそれぞれ重みづけして加算したものになります。技術点の重みづけは30%以下を原則としますが、特にValue for Moneyを達成するために必要な場合は50%を上限とします。

わが国において広く用いられるようになった総合評価落札方式との違いがわかるように数式で説明します。世銀では、次の総合評価値Bが最大となる者が落札者に選定されます。

$$B = \frac{C_{\text{low}}}{C} X + \frac{T}{T_{\text{high}}} (1 - X)$$

式中のCは入札者の評価入札額です。評価入札額というのは入札価格そのものでなく、予め定めた基準に基づいて国内調達優遇措置、支払いスケジュール調整、一括購入割引等の種々の調整を行った結果の金額です。ここでライフサイクルコストを加味する場合はその割引現在価値を算定して加えます。C_{low}は、履行可能な入札者のうちの最低の評価入札額です。Tは非価格要素である技術点です。T_{high}は、履行可能な入札者のうちの最大の技術点です。X、1-Xはそれぞれ価格要素、技術点に対する重みづけです。

この方式は、世銀のコンサルタント選定プロセスに用いるQCBS (Quality and Cost-based Selection) に近い方式です。コンサルティング業務でも同様の加算を行います。技術点の重みづけは工事等に比べて大きく設定されます。標準的又は定型的業務の場合に50~60%、やや複雑な業務の場合に70~80%です。さらに高度な業務に対しては90%とするか、技術評価のみで受注者を選定するQBS



日本大学 危機管理学部 教授

きのした せい や
木下 誠也

(Quality-based Selection) を適用することとしています。

このように世銀では価格の要素と技術点を足し算する加算方式を用いますが、わが国で工事に用いる総合評価落札方式は除算方式、つまり技術の評価点を価格点で割ります。加算方式に比べて技術競争が働きにくい仕組みです。さらにわが国の方式では入札価格がゼロ円に近づくほど際限なく高評価となる計算になりますが、世銀では履行可能な最低の評価入札額を満点とします。

わが国のコンサルタント業務に用いる総合評価落札方式では、世銀と同じく加算方式を用います。しかし、世銀と異なり価格評価はゼロ円入札で満点となり、予定価格と同額の場合に0点となります。世銀では予定価格の概念がないので価格評価が0点になることはありません。わが国では価格評価の重みづけを小さくしても価格評価が効いてしまうことになるのです。

わが国においてもValue for Moneyを達成するために、世銀などの例を参考にして総合評価落札方式等の見直しを進める必要があると考えます。世界標準に近い調達方式とすることが、わが国建設産業が国内での経験を海外で生かすことに繋がり、ひいては建設産業の国際競争力強化に資すると考えます。